



Title	メタフュシカ 第48号 彙報
Author(s)	
Citation	メタフュシカ. 2017, 48, p. 139-148
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/67702
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【彙報】

○ 哲学哲学史・現代思想文化学

〔研究室について〕

現在（2017年10月31日）、学部の哲学・思想文化学専修には22名が在籍している。大学院の哲学哲学史専門分野には博士前期課程に3名、同後期課程に13名が在籍しており、現代思想文化学専門分野には博士前期課程に6名、同後期課程に8名が在籍している。また、哲学哲学史専門分野には入江幸男教授と舟場保之教授が所属しており、現代思想文化学専門分野には須藤訓任教授、望月太郎教授、中村征樹准教授（兼任）、藤田公二郎助教が所属している。なお、教員人事異動としては、上野修教授が2016年度をもって定年退職し、名誉教授となった。舟場教授が2017年度より准教授から昇任した。望月教授が2016年度に大阪大学 ASEAN センター（在バンコク）のセンター長を退任し、2017年度より豊中キャンパスに復帰した。

本年度の講義・演習は以下の通りである。入江教授「グローバルな文脈における日本の哲学思想」、「論理学初級(1)・(2)・(3)」、「問答の観点からの認識論」、「共有知とは何か?」、「物語形式の知の分析」、「Discussing Searle’s ‘Collective Intentionality and the Assignment of Function’」、「Discussing Danto’s ‘NARRATIVE SENTENCES’」。舟場教授「カント『人倫の形而上学』“法論”を読むⅠ・Ⅱ」、「カントの自由論について」、「ドイツ哲学基本文献講読Ⅰ・Ⅱ」、「J・ハーバースの思想 X」。須藤教授「ニーチェの『ツァラトゥストラ』(6)・(7)」、「ハイデガー研究(6)・(7)」、「現代哲学史概説」。望月教授「デカルト＝エリザベト往復書簡を哲学カウンセリングの観点から読む」、「発展途上国における教育開発のための哲学実践」(Kunchapudi SRINIVAS 氏と共同)、「鶴見俊輔の思想形成と『悪』の問題」、「オルターグローバリゼーションの思想」。中村准教授「現代科学とインテグリティ(誠実性)」(江口太郎氏と共同)、「核の地政学：Hecht『Being Nuclear』を読む」、「事故の技術論」。藤田助教「フーコーの倫理学を読む」。そのほか、本研究室のリレー講義「西洋哲学通史(クザーヌスから現代まで)」(仏文研究室山上浩嗣教授協力)が開講されており、また、例年通り、各教授ないし准教授ごとに、学位論文執筆のための演習が実施されている。

なお、非常勤講師の方々の講義は以下の通りである。江口太郎氏(大阪大学)「現代科学とインテグリティ(誠実性)」(中村准教授と共同)、野々村梓氏(大阪大学)「西洋哲学通史(デカルトから現代まで)」(リレー講義)、吉永和加氏(岐阜聖徳学園大学)「他者論の現在と展望」、Halla KIM 氏(西江大学、韓国)“The Concept of Origin in World Philosophy”、Kunchapudi SRINIVAS 氏(ボンディシェリー大学、インド)「発展途上国における教育開発のための哲学実践」(望月教授と共同)。

研究室の成果発信として、本機関誌『メタフュシカ』と欧文機関誌 *Philosophia OSAKA* を毎年刊行している。同欧文機関誌の前年度号には、当研究室から以下の論文が掲載された。入江教授“Semantic Inferentialism from the Perspective of Question and Answer”、須藤教授“Was heißt „Indifferenz“? Zur „Durchsichtigkeit“ in Martin Heideggers Sein und Zeit”、舟場教授“Solidarität und das

substantialistische Verständnis der Volkssouveränität“、藤田助教 « Comment la philosophie de Foucault voyage-t-elle? 》。また、大阪大学文学会編『待兼山論叢』哲学篇を通じて、毎年、研究成果を発信している。同誌の前年度号には、当研究室から以下の論文が掲載された。小田裕二郎（哲学哲学史博士後期課程）「スピノザ『エチカ』における規範という問題」、戸谷洋志（現代思想文化学元博士後期課程）「ヨナスにおける“人間の自由”について——哲学的生命論と未来倫理の連関を中心に」。なお、研究室公式ホームページ (<http://www.let.osaka-u.ac.jp/philosophy>) および YouTube 公式チャンネル videometaphysica1 を通じて、研究教育活動の関連情報を随時発信している。なお、ホームページの方は 2017 年春に全面的にリニューアルした。

研究室の活動基盤として、研究会 handai metaphysica を主催している。2017 年 3 月に第 20 回 handai metaphysica 研究例会を開き、本機関誌前年度号の合評会をおこなった。そこでは、以下の発表がおこなわれた。大久保歩（現代思想文化学博士後期課程）「国家の死：ニーチェにおける正統性と主権の問題」、朱喜哲（哲学哲学史博士後期課程）「奈落の際で踊る哲学——ネオ・プラグマティズム第三世代による『表象』概念回復の試み」、上野教授「スピノザの存在論的実在論」。

研究室の関連催事として、2016 年 11 月に、UNESCO「世界哲学の日」記念イベントとして、ワークショップ「哲学で考える『悪口／ヘイトスピーチ』」を開き、講師に和泉悠氏（日本学術振興会特別研究員 PD、京都大学）を招いた。また、そのコメンテーターを朱喜哲と仲宗根勝仁（哲学哲学史博士後期課程）が務めた。2017 年 2 月に中村ゼミが、公開セミナー「SDI 構想と対峙した専門家たち——Computers in Battle を読む」を開き、ゲストに喜多千草氏（関西大学）を招いた。2017 年度より、望月教授推進の下で、大阪大学国際共同研究推進プログラム（タイプ B）として、国際共同研究「日本－ASEAN グローバル哲学研究交流ラボラトリー」を開始し、当研究室とチュラロンコン大学（タイ）文学部哲学科との間に国際ジョイントラボを設置した（文章末の付録「国際ジョイントラボ設置趣意書」を参照のこと）。同年 7 月に同教授が同研究の一環として、国際ワークショップ“Potentiality of Southeast Asian Philosophy I, II”（京都大学大学院文学研究科哲学講座と共催）を開催した。同年 9 月に、上野修名誉教授が、科学研究費基盤研究 B「二つのスピノザ・ルネッサンスの狭間——十九世紀フランス哲学におけるスピノザの影」として、影スピ第 1 回研究会を開催した（2016 年 11 月～2017 年 10 月の 1 年間に実施されたものを記載。以下も同様）。

そのほか、院生主催の研究会が定期的に開催されている。2017 年 6 月に第 15 回哲学ワークショップが開催された。そこでは、以下の発表がおこなわれた。仲宗根勝仁「クリプキ以降の指示の概念の批判的検討」、垣本伊守幹（現代思想文化学博士前期課程）／中村文彦（同博士後期課程）「専門知の多様性と社会」。

〔教員について〕

上野教授が、2017 年 1 月刊行のスピノザ協会編『スピノザーナ』第 15 号にて、論文「スピノザ『政治論』における jus（法／権利）の両義性」を発表した。同年 2 月刊行の『現代思想』3 月臨時増刊号にて、論文「美しいエチカ」を発表した。同年 3 月に共編著『主体の論理・概念の

倫理——二〇世紀フランスのエピステモロジーとスピノザ主義』(以文社)を刊行した。同月に本学にて最終講義「大いなる逆説スピノザ」をおこなった。同月に定年退職し、名誉教授となった。

入江教授が、2016年12月に共著 *Transcendental Inquiry: Its History, Methods and Critiques* (Palgrave Macmillan) を刊行した。

舟場准教授(当時)が、2016年11月開催の日本カント協会第41回学会にて、特別シンポジウム「3.11後の『公共』とカント——Kant in Fukushima」に登壇し、口頭発表「手続きとしての公開性もつポテンシャルティ」をおこなった。同年12月に前掲共著 *Transcendental Inquiry: Its History, Methods and Critiques* を刊行した。2017年3月開催の第2回カント法論研究会にて、近刊予定の共編著『グローバル化時代の人権のために——哲学的考察』の合評会に登壇した。同月開催の第1回討議倫理学研究会にて、口頭発表「討議倫理学と道徳的認知主義」をおこなった。同年4月に教授に昇任した。舟場教授が同月に前掲共編著『グローバル化時代の人権のために——哲学的考察』を刊行した。同年9月デュースブルクエッセン大学(ドイツ)開催の第11回日独倫理学コロキウムにて、口頭発表 „Nationalismus und/oder Potenzialität des Weltbürgerrechts bei Fichte“ をおこなった。

須藤教授が、2016年11月に朝日カルチャーセンター中之島教室の担当講座「ニーチェの生き、考えたこと」にて、第2回講義「ニヒリズム時代の人間のゆくえ」をおこなった。2017年8月刊行の『西洋古典叢書月報』第129号にて、書評「ソクラテスを廻る切れ切れの思い」を発表した。同年9月刊行の独語版清沢満之著作選集 *Skelett einer Religionsphilosophie* (Matthes & Seitz Berlin) にて、翻訳出版の協力者として表題作品に序文を寄せた。同月、第14回ニーチェ研究者の集いを開催した。

望月教授が、2016年12月に共著 *Energy Ethics: Intergenerational Perspectives in and for the ASEAN Region* (Konrad Adenauer Stiftung and Guna Chakra Research Center) を刊行した。2017年1月チュラロンコン大学(タイ)開催のAUSN・科学技術倫理センター・エウバイオス倫理研究会共同会議“Bioethics, Development Ethics, and Global Policy into Action”にて、口頭発表“Still Continue After Fukushima? Energy and Courage to Let Go of Nuclear Power”をおこなった。同年3月刊行の日タイ言語文化研究所編『日タイ言語文化研究』第4号にて、共著論文「留学して日本語で学ぶことの意味——タイ人高校生の日本留学へのニーズと展望」を発表した。同月に共著 *Recalibrating Careers in Academia: Professional Advancement Policies and Practices in Asia-Pacific* (UNESCO Bangkok Office) を刊行した。同月に赴任先の大阪大学ASEANセンターのセンター長を退任し、同年4月より豊中キャンパスに復帰した。

中村准教授が、2016年11月開催の科学技術社会論学会第15回年次大会にて、口頭発表「日本の研究公正の現状と課題」をおこなった。2017年1月刊行の東大科哲の会編『科哲』第18号にて、論文「研究不正問題についてどう考えるか——STAP問題を切り口に」を発表した。同年2月刊行の日本学術協力財団編『学術の動向』第22巻第2号にて、論文「技術と学問のあいだ——実学化と純化に揺れた革命期の学問」を発表した。

藤田助教が、2017年3月開催の日仏哲学会春季大会にて、口頭発表「狂気の呼び声——フー

コーの超越論的考古学とその自己解体」をおこなった。2017年度より、京都大学人文科学研究所の共同研究「フーコー研究——人文科学の再批判と新展開」に参加し、5月開催の第1回例会にて、博士論文『主体化の哲学のために——ミシェル・フーコー研究』の報告をおこなった。同年9月刊行の台湾カルチュラル・スタディーズ学会編『文化研究季刊』第159号にて、論文「傳柯的哲學如何行旅？」（林士鈞訳）を発表した。

〔学生について〕

藤野幸彦（哲学哲学史博士後期課程）が2017年3月、博士論文『存在・本質・力能——スピノザ形而上学における一義性と同一性』により、博士号を取得した。

2016年11月開催の関西倫理学会2016年度大会にて、井西弘樹（現代思想文化学博士後期課程）が、口頭発表「生きる意味としての学問——中期ニーチェにおける『認識』概念の変容をめぐって」をおこなった。また、同様に谷山弘太（同）が、口頭発表「道德の“価値”を問題にすること——ニーチェ『曙光』における“あらゆる価値の価値転換の試み”」をおこなった。同月刊行の『教育思想・教授法研究年報』第1号にて、井西弘樹が、論文「ニーチェ『教育者としてのショーペンハウアー』におけるGeniusと人間形成」を発表した。また、同様に谷山弘太が、論文「L・コールバークの道德教育論における正義justiceと公正fairness」を発表した。同月開催の関西アメリカ公法学会にて、早瀬勝明（哲学哲学史博士後期課程）が、口頭発表「法の存在論と判例」をおこなった。同年12月開催の関西教育学会第68回大会にて、谷山弘太が、口頭発表「道德教育論における倫理的相対主義の意義——中期ニーチェの道德批判から」をおこなった。同月刊行のショーペンハウアー協会編『ショーペンハウアー研究』別巻第3号にて、谷山弘太が、研究ノート「ニーチェ『人間的、あまりに人間的』における歴史的哲学」を発表した。2017年3月開催のスピノザ協会第65回研究会にて、立花達也（哲学哲学史博士後期課程）が、口頭発表「スピノザにおける部分と全体——書簡32の読解から『エチカ』へ」をおこなった。同年4月開催の応用哲学会第9回年次研究大会にて、朱喜哲と仲宗根勝仁が和泉悠氏とともに、大会シンポジウム「ヘイトスピーチと信頼」に登壇し、共同発表「ヘイトスピーチの言語哲学的考察」をおこなった。同月開催の日本ショーペンハウアー協会第27回ニーチェ・セミナーにて、井西弘樹が、自著「真理の“血肉化”としての笑い——ニーチェ『愉快な学』における“実験”思想」の合評会に登壇した。同年5月西江大学（韓国）開催の北米フィヒテ学会第13回隔年会議にて、嘉目道人（招聘研究員）が、口頭発表“The Problem of “können” in Kant’s B-Deduction and Its Significance for Fichte”をおこなった。同年6月刊行の関西倫理学会編『倫理学研究』第47号にて、井西弘樹が、論文「気質から情熱へ——中期ニーチェ哲学の転換点」を発表した。また、同様に谷山弘太が、論文「道德の“価値”を問題にすること——ニーチェ『曙光』における道德批判」を発表した。同年7月開催の京都ヘーゲル讀書會平成29年度夏期研究例會にて、井西弘樹が、口頭発表「認識者としてのニーチェ」をおこなった。同月開催のスピノザ協会第28回総会にて、立花達也が、ワークショップ「スピノザと現代形而上学」に登壇し、口頭発表「実体一元論の諸相：現代形而上学の観点から」をおこなった。同月開催の2017年度哲学若手研究者フォーラム

にて、小田裕二郎が、口頭発表「スピノザ『政治論』における理性の問題」をおこなった。また、同様に朱喜哲が、口頭発表「『推論』理解の変遷に見るネオプラグマティズムの系譜」をおこなった。同年9月刊行の日仏哲学会編『フランス哲学・思想研究』第22号にて、立花達也が、論文「スピノザにおける身体の変化と同一性」を発表した。同月開催のSTS Network Japan 夏の学校2017「科学と修辞——専門知コミュニケーションのデザインに向けて」にて、朱喜哲が、口頭発表「データによる正当化——ビジネスにおける説得と専門知の権威」をおこなった。同月ミーニョ大学（ポルトガル）開催の国際会議“Revisiting Richard Rorty”にて、朱喜哲が、口頭発表“Incarnated Vocabularies and Cultural Politics”をおこなった。同年10月開催の関西哲学会第70回大会にて、朱喜哲が、口頭発表「反表象的自然主義としてのネオ・プラグマティズム」をおこなった。また、同様に立花達也が、口頭発表「スピノザにおける感情と生理学」をおこなった。さらに、同大会で立花達也が、ワークショップ「一元論の多様な展開」に登壇し、口頭発表「最後にスピノザのものとされて残ったもの：分析哲学とイギリス観念論におけるスピノザの影」をおこなった。

（藤田）

* 付録「国際ジョイントラボ設置趣意書」

平成29年度大阪大学国際共同研究促進プログラム（タイプB）

日本－ASEAN グローバル哲学研究交流ラボラトリー（Japan-ASEAN Global Philosophical Research Exchange Laboratory）

ジョイントラボ企画であるタイプBに今年度新たに採択された本研究の全体構想は、第1に、日本と東南アジア諸国の中で哲学分野における研究交流を活性化し、相互理解を深め、グローバル化時代における新たなアジア哲学の方向性を探ること、第2に、本学大学院文学研究科哲学講座現代思想文化学研究室とチュラロンコン大学文学部哲学科の双方に設置されるラボから研究成果の国際的発信を進めるとともに、自由な発想に基づく若手研究者（院生、ポスドクを含む）の交流を促進すること、また第3に、発展する東南アジア諸国の都市において現代社会が直面する哲学的諸課題、例えばライフスタイルの変容、社会的多様性と包摂、情報・科学技術と市民社会倫理、共同体主義とリベラリズムの調停等について、日本対ASEAN諸国の比較研究を共同で行い、問題解決へ向けてアウトリーチすることに存する。加えて、近現代日本哲学の翻訳（タイ語訳）を進め、日本哲学研究のグローバル化を加速する。

哲学分野における国際交流は、これまで欧米あるいは東アジア諸国（韓国、中国、台湾）との交流に偏る傾向が強かった。本研究により、日本で独特の発展を遂げてきた哲学研究をASEAN+3の地域的視野の下で相対化するとともに、東南アジア諸国との国際交流を促進し、研究力と発信力を強化する。なお、本学は、海外拠点としてASEAN拠点（バンコクオフィス）を置き、東南アジア諸国の大学との交流実績がある。また、ジョイントラボ相手方大学の所在地であるタ

イ王国の首都バンコクは、ASEANのハブである。本学とチュラロンコン大学の双方に哲学分野の国際共同研究ラボを設置することは、持続的交流を進める上で無理なく、両大学の学術交流の幅と厚みを増す意義がある。

このプログラムによる招へい研究者である Kasem Phenpinant, Ph.D. は、現在、チュラロンコン大学文学部哲学科長を務めており、これまでも本学大学院文学研究科現代思想文化化学研究室との交流関係構築のために尽力してきた。また、相手方大学において今年度から始まった共同研究 'Living a Common Life' の提案者、リーダーでもある。ラボ設置による連携により、双方向型研究協力の組織的展開が可能になる。すでに今年7月、京都大学大学院文学研究科哲学講座と本学大学院文学研究科現代思想文化化学研究室との共催で「東南アジア哲学の可能性 I, II」(Potentialities of Southeast Asian Philosophy I, II) と題した国際ワークショップを開催(7月25日京都大学、26日大阪大学)、本企画により来学した招へい研究者の提題「東南アジアの精神を脱構築する」(Deconstructing Southeast Asian Mind) について、京都大学に滞在中の2名の外国人研究者(ミャンマーから San Tun, Ph.D.(ダゴン大学)、アメリカから Jay Garfield, Ph.D.(スミスカレッジ))、出口康夫京都大学大学院教授の他、本学側からも教員と大学院生が参加し、共同討議を行った。追って12月22日、続く第2弾の企画を大阪大学で催す予定である。

初年度は成果として、日本と東南アジア諸国の都市生活において現代社会が共通して直面する哲学的諸課題に関して、リサーチクエストを共有した上で、双方のラボからどのようなアウトリーチが可能なのか、その青写真を描くことが期待される。来年度以降は、若手研究者(院生・ポストドク)の国際交流を目的とした国際合同会議を定期的に開催し、ラボの持続的かつ発展的な運営を担う人材を育成する。相手方大学に対しては、ASEAN地域における共同研究の国際的展開を期する。そうした展開により双方のラボをハブとした哲学研究の国際交流が活性化することが期待される。

(現代思想文化学・望月太郎)

○ 臨床哲学

[研究室について]

本年度、当研究室には学部生17名、大学院生23名(前期課程11名、後期課程12名)が在籍しており、そのうち3名が未来共生イノベーター博士課程プログラム院生である。浜渦辰二教授、堀江剛教授、本間直樹准教授(兼任)、及びコースアシスタントの各スタッフが、哲学哲学史・現代思想文化学の教員と連携しつつ、教育・研究活動に従事している。

授業として、講義は「ケアの臨床哲学：死の倫理とケア」と「私の考える現象学・臨床哲学・倫理学」(浜渦)、「コミュニケーションの哲学」(堀江)、演習は「フェミニズム哲学を読む」(本間)、「Socratic Dialogue 文献講読」(堀江)のほか、教員3人合同による「倫理学概論」「倫理学の研究方法A～D」(学部生中心)、「臨床哲学研究A～D」(大学院生中心)が行われた。学部生・大学院生のみならず社会人の参加も受け入れている「ひろば臨床哲学」(浜渦・堀江・本間)では、

それぞれの関心に応じてグループに分かれ、そこで対話・議論をする回と、全体で集まって問題を共有する回を作るとともに、ゲストスピーカーを招いて話題を提供していただき、それに基づいて対話を行った。また、COデザインセンター開講科目として、本間准教授による授業「哲学対話入門」「マイノリティ・ワークショップ」「マイノリティ・セミナー」「哲学対話進行法」「当事者との対話」も行われた。さらに、非常勤講師としてマイケル・ギラン・ベケット氏に「Ethics in English」を今年度は一年間にわたって担当していただいた。

哲学哲学史・現代思想文化学専門分野とともに、機関紙『メタフェシカ』第47号（2016年12月）を刊行し、臨床哲学の大学院生2名の論文が掲載された。また、当研究室の雑誌『臨床哲学』第19号（2017年12月）をweb上で刊行した。

臨床哲学研究室の企画として、2017年3月21日に「当事者研究と哲学対話」というテーマで第40回臨床哲学研究会を開催し、石原孝二（東京大学）「当事者研究とオープンダイアログ」、永山亜樹「共歩と私らしさ」、松前香里「日常の中の治療的対話をめざして」、稲原美苗（神戸大学）「哲学対話における現象学のアプローチ」を発表した。2017年7月29日には第41回臨床哲学研究会を開催し、分科会ワークショップ「実践と研究の結びかた・ほどき方」というテーマで、三つのワークショップ（A：身体経験を記述する、B：事実の見つけ方：報道と学祭の現場で、C：哲学カフェ・メタ哲学カフェ）、個人発表として、永浜明子（博士後期課程）「共歩×臨床哲学×当事者研究」、村田観弥（神戸大学）「障害の包摂と排除の一考察：合理的配慮と権力との関係から」、横田恵子（神戸女学院大学）・大北全俊（東北大学）「加害-被害を越えるために希求される「赦し」：対話を構築し損ねたインタビュー集から聴こえる（はずの）贖罪の声を求めて」、三ツ田枝利香（博士前期課程）「ひとりの人を自宅で看るということをみんなで考える」を発表した。さらに8月27日には第42回臨床哲学研究会を開催し、服部佐和子（国立循環器病研究センター）「生のシュプール：Malort, Malspiel und die Formlation：Arno Sternの活動紹介」、栗田隆子（働く女性の全国センター代表）「シモーヌ・ヴェイユにおける社会と隣人愛をモチーフに女性たちの〈声〉について考える」、山口弘多郎（博士後期課程単位取得退学）「臨床哲学における公式の問題の問い直し」、本間直樹「哲学者のメチエ：排除と分断をうみださない研究のために」を発表した。

国際的な会議として、2017年8月7-9日に、韓国江原大学人文治療学の教員・大学院生とともに国際合同セミナーを豊中キャンパスで開催し、次の発表を行った。中岡成文「日米の高校生の哲学対話：コンフリクトの創造性」、堀江剛「組織における対話と哲学」、高橋綾「がん患者との哲学対話：哲学カウンセリング、人文治療学とケアリングをベースにした哲学対話」、松川絵里「副活用としてのカウンセリング効果：ベッドサイドの哲学カフェ」（以上8月7日）、本間直樹「哲学の対話とジェンダー：フェミニズムの視点から」、高原耕平「戦争と心的外傷」、萩野彩香「女性のための哲学カフェ」、Victoria Zach「ソーチャル・インクルージョンをエピソードで描く」、三ツ田枝利香「Tさんが自宅で暮らすということを支えるということ：訪問看護師としての体験より」、菊竹智之「私は踊っている：福祉施設のダンスに見る表現の主体」、及び哲学プラクティスについてのワークショップ（以上8月8日）、雀希峰「江原大学哲学科大学院哲学相談

治療人材育成プログラム」、金善姫「〈千と千尋の神隠し〉と〈ツアラトストラはかく語りき〉：病理的&治療的正体性類型事例分析」、李鎮南「ストア哲学基盤の憤怒治療」、金謙「人文治療学の視点からスマートフォンをスマートに活用する」、孫東善「怒りの解決技法と事例研究」（以上8月9日）。

このほか、2017年9月17-18日に、立正大学文学部哲学科との共催で「ALSの臨床現場と哲学対話：Ethical Counseling との出会い」を豊中キャンパス（17日）及び和歌山市市民会館（18日）で開催し、Carmen Cozma（Alexandru Ian Cuza 大学教授、ルーマニア）による講演、眞岩宏司（湘南工科大学）による「福祉ものづくり」報告、久住純司（ALS技術ピアサポーター）による「ものづくり」に関する紹介などを行った。

〔教員について〕

浜渦教授は「ケアの臨床哲学」研究会（2017年7月、代表者は浜渦より堀江に交代）の主催するシンポジウム「超高齢社会のなかでこれからのケアを考える」（2017年2月26日）、講演会「超高齢社会のなかドイツに学ぶ」（同年3月4日）、シンポジウム「超高齢社会のなかでACP（アドバンス・ケア・プランニング）を考える」（同年7月23日）を大阪大学中之島センターで開催し、いずれも自ら登壇・発表した。講演としては「北欧ケアの思想的基盤を掘り起こす」（明治大学人文科学研究所総合研究「現象学の異境的展開」主催第3回講演会「ケア・ジェンダー・いのち：北欧における現象学の展開」、2017年1月8日）、「ACPを知る～ACPの功罪～」（第5回リビングウィル作成会「エンディングノートとリビングウィルノート」、同年1月21日）、「海外との比較でケアを考える」（シンポジウム「超高齢社会のなかでこれからのケアを考える」、同年2月26日）、「ドイツの介護保険、後見人制度、事前指示書」（シンポジウム「超高齢社会のなかでドイツにまなぶ」、同年3月4日）、「スピリチュアルペイン」（がんカフェ～がんについて、知ろう、考えよう～第2回〈痛み〉、同年6月3日）、「看護の原点を見つめて—臨床哲学の視点から—」（第18回日本赤十字看護学会学術集会特別講演、同年6月24日）、「高齢者ケアにおける自己決定を考える」（第113回〈ケア〉を考える会、同年7月9日）、「事前指示と事前ケア計画の比較」（シンポジウム「超高齢社会のなかでACP（アドバンス・ケア・プランニング）を考える」、同年7月23日）、「意思決定支援について—二人の母を見送った体験から—」（大阪市中央区介護事業者四者合同研修会、同年7月26日）を行った。また、上智大学グリーンケア研究所（大阪サテライト）人材養成講座で「臨床哲学」の講義を2017年前期15回、かなしみぼすと（上智大学グリーンケア研究所修了生が立ち上げたグループ）主催の連続3回講座「かなしみとともに生きる社会へ」（同年10月）を行った。

国内での学会発表は「大阪大学での10年間」（関西哲学会ワークショップ「これまでの哲学教育、これからの哲学教育」、2017年10月22日、大阪体育大学）を行った。海外および国際学会・研究会での発表は、「On Dis/Ability in Husserl's Phenomenology」（The 7th Phenomenology for East Asian Circle Conference, 2016.12.18, Tokyo University）、「フッサール現象学における“能力と障がい”の問題について」（同年3月8日、中国・廣州中山大学）、「現代日本における終末期医療の問題」

(同年3月13日、中国・香港中文大学)、“On Dis/Ability in Husserl’s Phenomenology”, (Nordic Society for Phenomenology, Annual Conference, Phenomenology and the Body – Contemporary Perspectives、同年6月17日、Norwegian University of Science and Technology, Trondheim, Norway)、「死に行く患者のための家族によるケア—尊厳死を法制化すべきなのか?—」(同年9月15日、台湾・政治大学)、「日本における精神医療」(同年9月19日、中国・広州中山大学)、「日本における医療倫理」(同年9月21日、中国・広州中山大学)、“Phenomenology, clinical philosophy and medical ethics in end-of-life care”(同年10月25日、Hong Kong Shue Yan University)を行った。また、自身が代表を務める科研費による共同研究「北欧現象学者との共同研究に基づく傷つきやすさと有限性の現象学」の第2回研究会(2016年12月23日、明治大学駿河台校舎)、第3回研究会(2017年2月20日、神戸大学発達科学部)、第4回研究会(同年5月27日、日本大学通信教育部)、第5回研究会(同年9月30日、神戸大学文学部)を行った。論文としては、“To Live Together With Others — from Husserl’s Phenomenology of Intersubjectivity”(『臨床哲学』第18号、2016年12月)、および高山佳子との共訳論文としてインガ・レーマー「「最大限の価値に到達するマシン」から道理にかなう愛ある人間へ——フッサールの倫理学における主観性」(『臨床哲学』第18号)を発表した。

堀江教授は、以下の研究発表を行った。1) 大阪大学医療人文学研究会35回大会で「私の考える「病の語り」とは」について話題提供(2017年2月25日、豊中市千里公民館)。2) 大阪大学「ケアの臨床哲学」研究会で「ケアの組織を考える」について単独発表(同年2月26日、大阪大学中之島センター)。3) 江原大学との国際合同セミナーで「組織における対話と哲学」を発表(同年8月7日、豊中キャンパス)。また、以下の哲学カフェ及び対話進行役を行った。患者のウエル・リビングを考える会主催「まちなかカフェ風がんカフェ」(2017年3月11日、5月13日、6月3日、9月16日、11月4日の5回、いずれも神戸市あすてっぷKOBÉ)。患者のウエル・リビングを考える会主催「まちなか風「看取り」セミナー&カフェ」(2017年5月13日、9月2日、11月18日の3回、神戸市生活創造センター及び東灘区民センター)。学外への授業提供として、関西大学リベラルアーツ教育プログラム「生命科学と倫理をめぐる知性と感性」の一環として「科学技術と倫理問題」(2017年5月27日、関西大学千里山キャンパス)を実施した。

[学生について]

2017年2月6日、川崎唯史(博士後期課程)が「メルロ＝ポンティと生き方の問い：交流の問題を中心に」という題目で博士(文学)の学位を取得した。同年6月8日、堀寛史(博士後期課程単位取得退学)が「痛みの存在意義：臨床哲学と理学療法学の視座」という題目で博士(学術)の学位を取得した。また正置友子(博士後期課程)が単著『イギリス絵本留学滞在記：現代絵本の源流ウォルター・クレインに魅せられて』(風間書房、2017年1月)を刊行した。

論文発表について『臨床哲学』第18号(2016年12月)には、以下の学生の論文が掲載された。前原なおみ(博士後期課程)「看護師にとって老衰死とはどのようなものか：看護師Aさんの語りから」、正置友子「メルロ＝ポンティと子どもの現象学：『知覚の現象学』における人生の最初の数年間」、永山明子(博士後期課程)・永山亜樹(東京大学先端科学技術研究センター人間支援

工学分野学術支援専門職員)「自閉症スペクトラムのある青年との歩みにおけることばの選択および了解のプロセス:「困り」ということばの具体例から」、高原耕平(博士後期課程)「小さなもの」、青木健太(博士後期課程)「話すことと聞くことによる発見について」。『メタフィシカ』第47号(同年12月)には、桂ノ口結衣(博士前期課程)「あんたも、母:フェミニスト現象学を手がかりとした「母」についての考察」、高原耕平「リフトンを日本人はどのように読んできたか」の論文が掲載された。『待兼山論叢』哲学篇第50号(同年12月)には、永山明子「自閉症概念の変遷と事例からの検討:みるものとみられるものとの関係という視点」が掲載された。他の論文発表は以下の通り。神谷千織・佐々木美和・富安皓行・松本渚(博士前期課程)「野田村の現状と課題:山の向こうの私たちがみた野田村の今」(東日本大震災被災地復興フィールドワーク報告書、2017年3月)、永浜明子・永山亜樹・浜渦辰二「広汎性発達障がいのある青年の日常生活における「困り」に関する当事者研究:具体的現象と対処・対応」(日本教育保健学会年報、第24号、同年3月)、永浜明子・永山亜樹・浜渦辰二「関係の変化に伴う「支援」から「共歩」への移行:自閉症スペクトラムの青年との歩みから」(対人援助研究、第5号、同年3月)、日高悠登(博士後期課程)「死生から再考する医療文化」(宗教研究、第90号、同年3月)、高原耕平「ことばのすきまの他文化共生」(未来共生学、第4号、同年3月)、小川長(博士後期課程)「経営学における倫理に関する小論」(尾道市立大学経済情報論集、第17巻1号、同年7月)。また正置友子が『ウォルター・クレインの本の仕事:絵本はここから始まった』(青幻舎、同年2月)に寄稿した「ウォルター・クレインの絵本:ヴィクトリア時代に芸術と職人の技によって花開いた絵本文化」、書評として松本渚「書評森元斎「具体性の哲学:ホワイトヘッドの知恵・生命・社会への思考」」(未来共生学、第4号、同年3月)がある。

研究発表については、以下のものがあつた。竹内幸子(博士後期課程)「A Venue Consisting of a New Kind of Care: Focusing on Relationships In a Cooperative Venue」(第15回世界音楽療法大会、2017年7月4-8日)、日高悠登「リングス思想とスピリチュアリティ」(日本宗教学会第76回学術大会、同年9月16日)、三ツ田枝利香「ひとりの人が自宅で暮らすことを支える—訪問看護師としての体験より—」(第95回臨床実践の現象学研究会、同年11月4日)、高原耕平「Guilt and Numbing: R. J. Lifton's Philosophy of Survival」(Osaka University Japanese Studies Workshop, 同年7月22日)、「疎外と時間—20年目の復興住宅での対話から—」(日本災害復興学会2017神戸大会、2017年10月1日)、「ナイ・チャイ・パープータイ南部スマトラ沖地震津波被災者による仏教用語に依拠した罪責感表現について—」(日本災害復興学会2017神戸大会、同年9月31日、ポスター発表)、「R. J. リフトンのサバイバー研究における「罪責感の同心円」理念の倫理的的可能性」(関西倫理学会、同年11月19日)。また高原は新聞取材を受け、「名を呼び悼む/大震災の死者5586人/名簿作り進める大学院生企画」(神戸新聞、同年1月15日付朝刊)として掲載された。